

エイリアンの作り方：映画『アバター』における 解釈の誘導

| | |
|-----|---|
| 著者 | 山口 治彦 |
| 雑誌名 | CLAVEL |
| 号 | 2 |
| ページ | 59-69 |
| 発行年 | 2012-10-31 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1085/00001246/ |

エイリアンの作り方

—映画『アバター』における解釈の誘導—

山口 治彦

キーワード：映画，談話分析，物語，プロット，登場人物，観客

1. はじめに

エンタテインメントとしての映画が商業的に成功するためには、繰り返し広げられる物語について観客が総じて同じ解釈を持つことが望ましい。皆が同じように笑い、同じように手に汗を握る。受動的な鑑賞に慣れた観客には、そのように分かりやすく、安心して楽しめるものがある。そして、主人公に対し容易に共感できるものがある。

主人公に共感するためには、観客と主人公が同じ世界観を共有する必要がある。しかし、主人公はときに一般の常識とは異なる行動をとる。そのような場合、観客が安心して作品を楽しめるよう、観客の解釈を自然に誘導せねばならない。

2009年に大ヒットしたアメリカ映画『アバター』(*Avatar*)は、まさにそのような映画だ。『アバター』は地球人の青年が異星人の側に立って地球人と戦う物語である。映画の終盤で、敵役のクオリッチ (Quaritch) 大佐は、主人公ジェイク・サリー (Jake Sully) に対し、"Hey Sully, how's it feel to betray your own race?" (おい、人類を裏切るのはどんな気持ちだ?) というせりふを吐く。「人類を裏切る」行為は大罪のはずだ。だが、このようなせりふを浴びせられても、観客の主人公に対する信頼はゆるがない。では、観客の評価や解釈はどのように誘導されたのだろうか? この問いに談話分析の立場から (やや砕けたかたちで) 答えるのが小論のおもな目的である。

以下では、まず、異星人 (エイリアン) をどのように造形し、特徴づけるのかという問題に取り組む (2 節)。そして、エイリアンと対立するかたちで地球人がどのように描かれるかに着目する (3 節)。エイリアンの側に立ち、地球人を相手に戦うという選択をよしとする理由がそこにあるはずだ。

2. 『アバター』におけるエイリアンの造形

『アバター』には、青い皮膚で身長 3 メートルほどの異星人ナヴィ (Na'vi) が登場する。このエイリアンをどのようにデザインするかが、この映画を製作するにあたって大きな課題になったようだ。2 節では、エイリアンの特徴づけの方法について、映画のプロット、ハリウッド映画におけるエイリアン造形のパタン、そして、キャスティングに絡めて論じたい。

2.1 プロット上の要請

地下資源の豊富な惑星パンドラでは、動植物が独特の生態系を形作っている。大気は地球とは大きく異なり、人類はマスクなしでは生きられない。資源採掘のために交渉を行いたいナヴィは巨大である。そこで、ナヴィと人類の遺伝子を掛け合わせた人工の身体 (アバター) を合成し、その人工身体に精神を同調させて行動する実験がおこなわれている。映画の設定はそのようなものだ。

アバターの身体でナヴィの社会に入り込んだ主人公ジェイクはナヴィの文化習慣を学び、やがて族長の娘ネイティリ (Neytiri) と恋に落ちる。時を同じくして、ナヴィの居住区域の地下に眠る鉱物資源を手に入れるために、地球から来た企業 RDA 社は強硬手段に出る。ナヴィを追い出すために、彼らのコロニーである巨大な樹木、ホームツリー (Hometree) を爆撃したのだ。ジェイクは自分の雇い主でもある RDA に立ち向かい、ナヴィとともに RDA の傭兵部隊に戦いを挑む。そして、最終的にはその戦いに勝利した後、ジェイクは地球人としてのアイデンティティを捨て、ナヴィに同一化して物語は幕を下ろす。

このような筋立てから、異星人ナヴィのデザインには一定の制約がかかる。当然ながら、異星人であるので地球人と見た目にも異なった存在でなければならない。地球人と同じ体格で、同じ顔をしていたら、映画が分かりにくくて仕方がない。だから一目でそれと分かる外見のほうがいい。と同時に、観客が共感できる存在でなければならない。しかも、ヒロインには主人公が恋に落ちるのもっともだと納得させるだけの魅力も必要だ。要するに、エイリアンとして特徴づけられるだけの違和感と距離感を持ちつつも、主人公 (と観客) を魅了するだけの親近感と魅力が必要なのである。

このようなプロット上の要請から生まれたのが『アバター』におけるエイリア

ン、ナヴィである。彼らは、先にもふれたように、3メートルの身長に青い縞模様の肌、そして長い尻尾まである。明らかに人類とは異なる。その一方で、役者の表情がコンピュータ合成された顔つきは、どこか猫科の動物を思わせるものの、じゅうぶんに人間的で、多くのアメリカ人が共感を持てるように、強靱でありながらも長くしなやかな四肢をしている。

『アバター』におけるエイリアンの造形は、このようにプロット上・文化上の必然に裏づけられている。では、それまでのハリウッド映画のエイリアンの作り方と比べると『アバター』のナヴィはどのような位置を占めるだろうか。

2.2 ハリウッド的エイリアンの伝統

ハリウッド映画に登場するエイリアンの外見は、人類にとって敵対的であるか友好的であるかによってふたつのタイプに分けられる。

人類に対し敵意を持ったエイリアンは、せん滅すべき対象として描かれる。平たく言えば（そしてひどい言い方だが）、殺してもいいエイリアンである。『エイリアン』、『プレデター』、そして『インディペンデンスデイ』などに現れるエイリアンがその例だ。エイリアンだってその命をむやみに奪うのは問題だ。だが、エイリアンをやっつけて人類を危機から救うという、分かりやすい筋立てにしたいために、このような娯楽映画では「殺してもいい」エイリアンを造形する必要が生まれる。

このような要請を背負ってデザインされるエイリアンは、昆虫や爬虫類など、人間や哺乳類から遠いイメージをまとうことが多い。生理的に嫌悪感・恐怖感を催す存在として描かれるのだ。その目はしばしば私達とのアイコンタクトを許さない構造で、心情を察することなどできない。心を通わせるコミュニケーションは不可能なのだ。

さらには、「やらないとやられる」という危機感が、敵対的エイリアンにはついて回る。たとえば、『インディペンデンスデイ』のエイリアンは先住民に対し死しか望まない。だから、人類にとってせん滅せねばならない対象となる。

これに対し、友好的な（非＝敵対的な）エイリアンはもっと人間に近い存在として特徴づけられる。ETにしろ、『スターウォーズ』のチューバッカにしろ、『スタートレック』の Mr.スポックにしろ、彼らはみなどこか人間的で、表情やしぐ

さから気持ちが読み取れる。アイコンタクトが可能で、しかも、名前があり、個として認知される。

では、『アバター』のナヴィはどちらに位置するのか。主要な登場人物4名は名前が明かされており、表情は豊かだ。そのうち3人は英語を話し（主人公たちもナヴィのことばを話せるので）、コミュニケーションにさしたる支障もない。つまり、ハリウッド映画の類型からすれば、ナヴィは友好的（非＝敵対的）なエイリアンとして特徴づけられる。

2.3 キャスティングに見られる偏り

さて、物語の設定とエイリアンのデザインは以上のようにになっているのだが、映画だけにその役を役者が演じなければならない。『アバター』におけるエイリアンの造形を考えるには、キャストイングにおける偏りも考慮に入れる必要がある。

その偏りとは、ナヴィの姿で登場する役者の人種にかかわる。先述のように、ナヴィの主要な登場人物は4名で、ネイティリ (Nytiri)、ツーテイ (Tsu'tey)、モアト (Moat) そしてエイトゥカン (Eytukan) である。さらに地球から来た人間でアバターの身体を操る登場人物が、主人公のジェイク、研究チーム筆頭のグレース (Grace Augustine)、そしてそのもとで働く研究者ノーム (Norm Spellman) だ。

このうち、ネイティリはZoe Saldana、ツーテイはLaz Alonso、そしてモアトはCCH Pounderによってそれぞれ演じられる。彼らは皆アフリカ系アメリカ人である。そしてネイティリの父、族長のエイトゥカンはWes Studiによって演じられているが、彼はネイティブアメリカンの血を引く。つまり、ナヴィの登場人物は、黒人とアメリカインディアンというように、人種的にはマイノリティの人たちによって演じられるのだ。他方、アバターのボディーを駆る地球人は、ジェイクはSam Worthingtonが、グレースはSigourney Weaverが、そして、ノームはJoel David Mooreが、それぞれ役を担当する。彼らは皆、いわゆる白人であり、人種的にはマジョリティに属する。¹

このことは何を意味するのだろうか。

¹ ちなみに、The Internet Movie Database が挙げる *Avatar* の配役表をクリックして俳優の写真を見れば、劇中と平生の姿を同時に見ることができて、便利である。

偏見や差別意識を持つ、持たないにかかわらず、人種は人を外見から区別する分かりやすい特徴となる。したがって、自分と同じ人種に属する人よりも、異なる人種に属のほうが他者性を帯びやすい。『アバター』では、マジョリティのアメリカ人が暗黙のうちに持つ他者性の感覚が配役に利用されている。つまり、マジョリティを占める白人がマイノリティの人たちに対して持つ距離感、これが、主人公たち人間とナヴィとを隔てる距離感に重ね合わされているのだ。おそらくは意図的に。

そして、一般の観客は、この配役上の偏りをあまり意識することなく映画を観る。暗黙のうちに共有されている前提は、映画のストーリーのなかでは説明されない。したがって、たいていはそれと気付かれぬまま、物語が進行する。

人種に関して付言すると、『アバター』は「白い救世主」(white savior)タイプの物語であると、つとに指摘されている。ハリウッド映画でおなじみの白人の男性が弱きを助けるという物語の特徴を持つというのだ。たしかに、『アバター』を白い救世主タイプに分類することは可能である。また、キャスティングの偏りに見たように、この映画には白人中心の視線や価値観が感じられる。

しかし、物語の最後で主人公ジェイクは、惑星パンドラの超自然的存在エイワの力を借りて、ナヴィに完全に同化する。この点が一般の白い救世主タイプの物語と異なる。白人が演じる主人公が、マイノリティの俳優陣が演じるナヴィと同化するのである。つまり、地球人の主人公と異星人のナヴィを隔てる距離——マジョリティとマイノリティを隔てる差異——が物語の最後で象徴的に解消されるのだ。

思うに、このような結末があるからこそ、人種的に偏りの強いキャスティングをあえて行ったのではあるまいか。問題の差異を物語の結末に解消するのであれば、その差異は結末まで保持しておかねばならない。そのようなプロット上の必要に応えるために、主人公たちアバターを操る人間と原住民のナヴィという外観は同じ両者を区別する特徴として白人か非＝白人かという対立が利用されたのだろう。²

² 物語の前半部では、アバターを操る地球人はシャツや帽子を着用し、服装の上で半裸の（アメリカインディアンを思わせる）Na'viと一線を画している。しかし、中盤以降、主人公のジェイクはほかの Na'vi と同じ格好をするようになり、同化的傾向を強める。それでも、顔の表情や発音のなまりでジェイクと Na'vi は弁別されている。

と同時に、問題のマジョリティとマイノリティの差異が結末で解消されるという筋立ては、人種差別的であると批判されかねないキャスティングに対する一種の保険にもなる。イデオロギー的に中立的な作品はありえない。あらゆる物語は一定の世界観を提示し、そこには語り手の態度が表明される。そして、商業的成功を目指す映画である以上、表明される語り手（映画製作者）の態度は観客に容易に受け入れられるものが多い。人類と異星人の垣根を越える、マジョリティとマイノリティの垣根が解消される、という考えはたしかに現代の観客が受け入れやすい主張である。

3. 地球人に背を向けるために

2 節でみたように、『アバター』におけるエイリアンの作り方は、プロットや観客の共感を得るための必然に裏打ちされていた。そして、ナヴィの外見を含めた特徴は、おもに主人公たちとの関係において定められていた。つまり、人間とは明らかに外見は異なるが、友好的であると観客が認知できる特徴を持ち、主人公が恋に落ちるだけの魅力を持つ。と同時に、アバターを操る主人公との差異は結末まで残しておく。このようなかたちで人間と異星人ナヴィとの関係は規定されている。

さて、『アバター』にはもう一種類の人間が登場する。希少鉱物をねらう企業 RDA の側の人間である。彼らにとっては、ナヴィは常に「青い猿ども」(blue monkeys) であり、駆逐すべき対象である。主人公が企業側の人間に対し背を向け、ナヴィの側に立てるようにするもっとも簡単な方法は、企業の側の醜悪さを強調し、蔑むべき存在として描くことだ。まずは、観客の心情を企業側の人間から遠ざける操作について確認しておこう。

3.1 『アバター』が見せる醜い人間の姿

ナヴィと企業側は常に対比される。ナヴィは独自の文化と伝統を持ち、母なる自然を敬う。自然との一体感を重視し、自然と共生する存在である。エコロジーを重んじる現代の主潮に裏付けられた存在と言える。ここでは詳述しないが、主人公がナヴィから彼らの文化を学ぶにつれて、観客のナヴィに対する共感が高まってゆく。

これに対し、企業側は軽蔑すべき存在として描かれる。強欲・敵愾心・無知・無慈悲といった彼らの特徴を順に確認しよう。

まず、企業側は利益を何事にも優先する、強欲な存在である。彼らはナヴィの居住地域の地下に眠る希少鉱物がほしいのだ。欲に駆られた人間は醜い。彼らもその例に漏れない。しかも、彼らが求める鉱物はアンオブテイニウム(unobtainium)と名付けられている。テニハイルニウムとでも訳してよい命名である。彼らの強欲に対する映画製作者の皮肉な視線がこの名前に込められている。観客は物語の最初から企業側に距離を置くことになる。

企業側はまた、敵対的でもある。以下は、RDAの傭兵部隊を束ねるクオリッチ大佐のことばだ。映画の冒頭で彼はこう話す。

(1) QUARITCH: We have an indigenous population of humanoids called the Na'vi. They're fond of arrows dipped in a neurotoxin that'll stop your heart in one minute. And they have bones reinforced with naturally occurring carbon fiber. They are very hard to kill.

(この星には、人間型の原住民がいて、ナヴィと呼ばれる。奴らは神経毒をぬった矢を好み、当たれば1分で心臓停止だ。その骨格は生まれながらに炭素繊維で補強されていて、殺すのはとても難しい。言わずもがなだが、「殺すのはとても難しい」という発言は、友好的とは対極にある。

さらに、企業側は無知な存在でもある。目先の欲に目がくらみ、惑星パンドラの特異な生態系ネットワークの重要性を理解できない。パンドラの木々の根の間には電気化学的な交信が見られ、人間の脳よりも結合回路数が多い星全体を網羅するネットワークとなっている。非常に特殊で貴重な生態系ネットワークの重要性を訴えるグレースに対し、RDA社側の責任者セルフリッジ(Selfridge)はこう言い放つ。

(2) SELFRIDGE: What the hell have you people been smoking out there? They're just goddamn trees. (おい、野外調査で何をやってラリっちゃったんだ？たかだか木のことだろう。)

最後に、企業側は無慈悲で利己的な存在でもある。たとえば、彼らは、ナヴィが住む巨木ホームツリーを爆撃して破壊する。ナヴィを立ち退かせ、アンオブテ

イニウムを手に入れるためである。

しかも、その爆撃のシーンは、特にアメリカ国民にとって衝撃が大きい。ミサイル攻撃を受けた巨木が、上からたくさんの破片などを落としながら、煙を上げて炎上し、そして倒れる。このシーンを見て、9.11のツインタワー崩落を連想する人は少なくないようだ。アメリカ国民に対してあまりに大きなインパクトを持つ事件が映画のなかの出来事と意図的に重ね合わせられている。実際、インターネット上の一般視聴者のレビューには、企業側のホームツリーに対する攻撃を「テロ攻撃」("the terrorist attack")と表現しているものがあつた。同時多発テロとこのシーンを重ね合わせたゆえの表現と言える。

このシーンと9.11を重ね合わせた観客は、これだけの無法な攻撃を受けたのだから、報復する正当性が保証されている、と判断する。それが映画製作者のねらいだ。非常に分かりやすいかたちで、ナヴィと企業側が善と悪、被害者と侵略者にそれぞれ振り分けられる。

強欲・敵愾心・無知・無慈悲、これだけの醜い側面を見せつけられたら、企業側に肩入れしづらくなるはずだ。企業側、つまりは地球人側に背を向け、ナヴィのために戦う主人公を批判しはしまい。観客が主人公に共感できるよう、人間の醜悪な姿がひとつひとつ周到に描写されているのである。

3.2 エイリアンが物語にもたらす対立の構図

これまでの観察をもとに、エイリアンの造形と作品内の対立関係との関係について考えておこう。エイリアンとは、定義上、人間にあらざる存在である。だから、エイリアンをわざわざ登場させる物語は、必ず、[人間]対[非＝人間]という対立関係を内在することになる。この対立関係がもっとも単純に表れるのは、[人類]対[エイリアン]という戦いにおいてである。その場合、エイリアンは人類・地球を滅ぼすかもしれない、強力に敵対的な存在として造形される。そのほうが、戸惑うことなくエイリアンを攻撃できるからだ。

もちろん、ほかにも可能性はある。2.2節で見たように、エイリアンが友好的な（少なくとも人類に破滅をもたらすことはない非＝敵対的な）存在として登場することも可能だ。実際、『アバター』のナヴィは、友好的なエイリアンとして特徴づけられる。そして、このタイプの映画は、敵対的で強いエイリアンが現れる

ものよりは、物語の構造が必然的に複雑になる。

この種のエイリアンは友好的であるがゆえに、主人公を強く引き寄せる。しかし、エイリアンであることには変わらないので、主人公以外の人たちの目には敵対的に映る。そこで、[主人公] 対 [その他の人たち] というかたちを取って、対立が表面化する。この場合、先の [人類] 対 [エイリアン] のパターンとは異なり、エイリアンは非力なほうがいい。ちょうど子どもたちに助けられる ET のように。主人公と観客の共感を得やすいからである。はたして、ナヴィも RDA 社の武力の前には無力であった。

強調しておきたいのは、[人類] 対 [エイリアン] というパターンを取ろうが、[主人公] 対 [その他の人たち] であろうが、このような対立を下支えするのはエイリアンという存在だということである。エイリアンは [人間] 対 [非＝人間] という対立関係を内在するので、物語を動かす要因となりえるのだ。

ここでエイリアンという存在をもう少し上位のカテゴリー「外的存在」に置き換えてみよう。観客と主人公は同じグループに属することが多いが、そのグループの外に位置するものがここでいう外的存在である。『アバター』を撮るにあたって監督キャメロンが参考にした西部劇『ダンス・ウィズ・ウルブズ』では、アメリカインディアンのスー族がこの外的存在として登場する。ナヴィをアメリカインディアンのスー族に、そして、RDA 社側の人間を白人からなる騎兵隊に置き換えたら、『アバター』と『ダンス・ウィズ・ウルブズ』の構造はびたりと重なる。

本来帰属すべきグループ——『アバター』では人類、『ダンス・ウィズ・ウルブズ』では白人社会——に背を向ける行為はリスクを伴う。観客の心が主人公から離れるかもしれないからだ。そのリスクを軽減するために、『アバター』や『ダンス・ウィズ・ウルブズ』で取られた方法は、敵対関係を丹念に描くことだ。『アバター』では、ナヴィの母なる自然を敬う、プロ・エコロジー的姿を描くとともに、それとは対照的な RDA 社側の強欲で敵対的な側面を強調する。『ダンス・ウィズ・ウルブズ』では、スー族は母なる自然を愛する敬虔な種族であるが、騎兵隊に代表される白人は強欲で無知な存在と描かれる。

このように整理すると、『アバター』におけるエイリアンの作り方と敵対する人間の特徴付けは、多くの必然に裏付けられていることが分かる。『アバター』のストーリーには目新しいものがないとの批判がしばしばなされるが、これはある意

味当然なのかもしれない。物語におけるエイリアン（外的存在）という存在は、まったく自由に創出できるというものではない。常に人間（内的存在）との対立関係を物語に持ち込むだけに、その造形は話の筋立てに影響する。エイリアンを登場させるという設定が、筋立てが定型へ向かう契機にもなるのである。

4. おわりに：エンタテインメントと説得と皮肉

本稿では、映画『アバター』の分析を試みた。エンタテインメントがエンタテインメントとして楽しめるためには、観客の側で解釈が統一されているほうがいい。そのために、映画製作者は細心の注意を払って、観客の解釈を誘導しようとする。そして、主人公がとった行動について観客をじゅうぶんに説得できる強い映画が、商業的に成功する。

観客を説得するためには、映画製作者と観客が共有する前提を見極めることが重要だ。観客が共有する当たり前の前提は、わざわざ映画のなかで説明されない。逆に、観客が共有しない前提はプロットの棘となる。地球人と異星人を比べたら、地球人のほうに肩入れするのが観客の自然な反応だ。その逆を行かねばならない『アバター』は様々な手段を使って、観客を誘導する。そして、筋立てには目新しいものがないものの、多くの観客を説得できる強い物語を提示しえたのである。

いや、観客になじみの深い定型的なプロットを用いたからこそ、観客の共感を得やすかったと言ってよいだろう。定型的であることと陳腐であることは同じではない。定型的な語りを繰り返し広げることが、しばしば効率的なコミュニケーションを可能にするからだ（拙論「汗と涙のシンデレラ：サクセスストーリーの語り方」『言語』37:1, 2008を参照）。

もっとも、『アバター』はアメリカ国民のだれしにも好意的に受け入れられたわけではない。一部の保守派に『アバター』は、反アメリカ的な映画だと批判されている。この批判も映画製作者には織り込み済みだ。なぜなら、『アバター』はブッシュ政権に対するアレゴリーでもあるからである。最後の決戦を前にして、傭兵部隊の隊長クオリッチ大佐は兵士に対し演説を行う。そのことばがとくに一部の保守派政治家の勘に触ったのだろう。

(3) QUARITCH: Our only security lies in pre-emptive attack. We will fight terror with terror. （われわれの安全保障は先制攻撃にこそ

ある。テロにはテロ（軍事的脅威）で戦うのだ。）

クオリッチのせりふに出てくる"pre-emptive attack"とは、先制攻撃のことだが、ブッシュ政権が 2002 年の国家安全保障戦略に関する方針として打ち出した考えを想起させる。すなわち、国家の安全保障が大きな脅威にさらされている場合、敵の攻撃開始時期が明確に判明せずとも、アメリカは先制攻撃を行う用意がある、とした考えである。その後の"fight terror with terror"もブッシュ政権時代に流布された言い回しである。つまり、ブッシュ政権側の言説が、悪役の大佐の口から語られる格好になっている。しかも、9.11 の攻撃を受けた側になぞらえられているのは、先にも述べたようにナヴィのほうである。一部の保守派議員の反感を買ったとしても、それは当然かと思う。明らかに皮肉の矛先が保守派に向けられているのであるから。そして、皮肉の的にされた保守派の一部に反感を買おうとも、この映画がエンタテインメントとしての高い説得力を持っていることに変わりはないのだ。